2020年オリ・パラへ新聞業界盛り上がる

新聞制作のさらなる効率化やサービスの向上に協力

日本新聞製作技術懇話会
会長　上坂　義明

平成29年の新春を迎え、謹んでご挨拶を申し上げます。

懇話会は年頭、会員社を1社増やして44社での再出発となりました。懇話会は多くの業種に属する会員社から成り立っており、互いに情報交換を行って協力してゆくことで、最先端の技術と柔軟なアイデアを新聞業界への提案活動に活かしていける特性を持っています。会員社数が増えることは、大変喜ばしいことです。

懇話会の運営は、評議員会と3つの委員会（企画委員会／クラブ委員会／広報委員会）の活動を軸に行っていますが、昨年は初めての試みとなる「CONPT技術リサーチ会」を開催しました。

8月末、15社18名が横浜の新聞博物館付属会議室に集い、それぞれ自社の業務内容を紹介しながら得意分野を披露しました。タブレットの活用では印刷現場の管理水準を向上させる新構想の発表、新しい読者を増やすことに役立つであろうデザインや書体の取り組み、話題沸騰のドローンの現状と考えられる新聞界への適用例の紹介など、3つの分野でのレクチャーも行いました。

こうした活動が会員社間の個人的なつながりを強め、CONPT参加の価値を高めることを期待するものですが、同時に、新聞界へのより広範な提言に結びつけてゆければ、と願っています。

さて私は昨年の年頭の抱負のひとつとして、「新聞界とベンダー間の情報交換の場」を目標に掲げていましたが、こちらも何とかスタートが切れたのではないかと考えています。

昨年9月、12社で構成される全九州新聞社制作・印刷担当局長会議に懇話会メンバー5名が参加させていただき、現状の問題点に加え、将来欲しい開発テーマやビジネスモデルのアイデアについて忌憚のない意見交換をさせていただきました。こうした会議に参加してのの対話は初めてのことでしたが、新聞界と問題認識を共有し、新聞社のお役にたつ提言に結びつけたいという懇話会の思いは伝えられたものと思っています。

また11月には北海道印刷5社会にも参加させていただき、私たち懇話会の技術テーマのヒントにつながるご意見を聞かせていただきました。懇話会活動の活性化に役立つ良い刺激となりましたことを感謝しています。

懇話会は、新聞制作のさらなる効率化とコストダウン、読者サービスの向上、新聞発行部数が再び増加に転ずるための工夫とアイデア、新聞社の強みを生かした新しいビジネスの発掘などに協力していきたいと考えています。

未筆になりますが、懇話会は今年もさまざまな企画を予定しています。今年もよろしくお願い致します。

ICT活用で印刷業界に〝まさか〟の大逆転を

富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ
代表取締役社長　真茅　久則

明けましておめでとうございます。業界の皆さまにおかれましては希望に満ちた清々しい新年をお迎えのことと、心よりお慶び申し上げます。また平素は弊社に対し格段のご支援を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて平成28年を振り返ると、イギリスのEU離脱問題やアメリカ大統領選におけるトランプ氏の勝利をはじめ、世界で「まさかの逆転」が連鎖的に起こった年でした。日本国内での大逆転とは、独創的な「特殊なアンダーハンドパス技術」が最大の勝因の一つだと分析していましたが、こうした高度な技と阿吽の呼吸があれば、個人の力では敵わずともチーム力で戦えるのだということを、五輪の大舞台で選手たちがみごとに証明してくれたわけです。これはそのまま日本の産業界にも当てはまるのではないでしょうか。

では、これまでの印刷業界において「まさか」と思われていたものを覆す変革とは何か。その一つが「ICT」であり、企業間・工程間を繋ぐバトン技術にあたるものがワークフローシステムではないかと思います。

FFGSはICTに真剣に取り組み、「工程の全体最適化・自動化」「クライアントとの連携強化」を目指し、「ICT活用」「マスカスタマイゼーション」という最新の市場ニーズに即応する実践的なソリューションをご提供してまいる決心です。

そして高耐刷無処理版を加え一段と充実した「SUPERIA」に代表される富士フイルム伝統の「印刷材料技術」と、インクジェット技術を始めとする「革新的テクノロジー」を武器に、皆さまの課題に「最適な解」を提示し、一社一社の商機拡大・収益アップのお手伝いをしてまいります。

市場の変化を的確に予測しながら、業界のトータルプランナーとして力強く印刷の革新に挑み続けるFFGSに、本年もどうぞご期待ください。

最後になりましたが、皆さま方のご健勝とご多幸、ますますのご発展をお祈りし、新年のごあいさつとさせていただきます。

新聞に追い風吹く今、生き残りへ〝最後の決戦〟

西研グラフィックス
代表取締役社長　並田　正一

新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

さて昨年は日銀のマイナス金利に始まり、英国のEU離脱、トランプの大統領当選など予想しないようなことが次々と起こるなど、激動の時代の幕開けを予感させられました。

その中で、新聞を取り巻く環境はこれまで以上に厳しさを増しつつあるように感じられます。新聞に深く関係する者として、今年はこれまで以上に気合を入れて頑張っていかなくてはいけないと気持ちを引き締めている次第です。

新聞各社では〝逆境〟に負けてはならじと、昨年からは2020年の「東京オリンピック」に備えての設備更新、強化の動きが活発化して来たことは、業界関係者としては何より心強いことです。

リオ・オリンピックでの金メダルラッシュを受けて、東京への期待感が急激に盛り上がって来ているのが感じられます。

これまでも新聞社の設備投資はオリンピックが後押しする傾向がありましたが、今回はよりその傾向が強いように思われます。特に今度の設備投資は従来の増ページ、増カラーというような「高度成長型投資」から省エネ、省コストという「体質強化型」に変化して来ており、省資源タイプの4×1輪転機の導入の加速化や、過度の自動化、省人化を避けた本当の実利的な投資指向が強まっているように見受けます。

成長領域事業拡大へITソリューションビジネス強化

キヤノンマーケティングジャパン
代表取締役社長　坂田　正弘

昨年、キヤノンマーケティングジャパングループは5カ年計画である長期経営構想フェーズIIIを策定し、「先進的な『イメージング&IT』ソリューションにより社会課題の解決に貢献する」という役割を果たすべく、新たなスタートを切りました。

キヤノンの強みであるイメージング技術とIT技術を組み合わせたソリューションを展開し、成長領域と位置づけているネットワークカメラやプロジェクターなどの売上比率を高めることができたほか、主要製品事業のシェアを高め、グループとしての総合力を向上させることができました。

本年は、成長領域の事業拡大のさらなる加速と全事業領域におけるITソリューションを基軸としたビジネスの強化、既存領域の収益向上を推し進め、長期経営構想フェーズIIIに弾みをつけていきます。

また業種業態に即したお客さま中心のフレームワークへのシフトを進め、お客さまと共に成長する企業グループを目指します。

成長領域事業では、ネットワークカメラ、商業印刷、業務用映像機器、アウトソーシングビジネス、セキュリティビジネス、医療ソリューションなどにおいて、リソースの重点配置や専任組織の設置、さらに他社とのアライアンスの積極展開によりビジネスを強化します。またIoTやデジタルマーケティング、クラウドサービスやデータセンターを最大限に活用したサービスを展開し、事業の変革と成長を加速します。

既存領域事業では、オフィス向け複合機やデジタルカメラ、インクジェットプリンターなどの主力事業において、多種多様なお客さまのニーズを営業活動やデータ分析を基に的確にとらえ、高付加価値ソリューションを展開することで収益性の向上とシェアの拡大を図ります。

またコールセンターや修理体制の革新によりアフターサポート体制を強化し、顧客満足と品質のさらなる向上を目指します。

お客さまのニーズが急速に変化する中、当社はお客さまを深く理解し、お客さまとともに社会の課題解決に貢献することで、継続的に事業を成長させてまいります。

本年も皆様のさらなるご健勝とご発展をお祈りし、今後もなお一層のご支援、ご厚誼を賜りますようお願い申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

速乾印刷はフレッシュプリントへと続く

日本アグファ・ゲバルト
代表取締役社長　松石　浩行

2017年明けましておめでとうございます。

旧年中は、弊社グラフィックス製品への格別のご愛顧を賜り、心より御礼申し上げます。

日本アグファ・ゲバルトでは2012年より現像レスプレート「アズーラ」と油性インキによる速乾印刷を推進してきました。その後、パウダーレスインキや速乾用の印刷用紙など、諸資材メーカーの精力的な開発もあり、油性インキで実現できる速乾印刷の乾燥レベルは、いまやUV印刷機と変わらぬほどとなりました。

そして速乾印刷に取り組まれた印刷会社では工場内、さらには複数の拠点に設置されている各種印刷機が、速乾印刷を行うことですべて標準化されることにより、単に速く乾くだけでなく、CMSを容易に統一できることで、印刷品質も格段に上がりました。

しかも、あらゆる無駄が排除され、結果として生産性が飛躍的に向上するというさまざまなメリットを生み出しました。アズーラ速乾印刷に取り組むことで、多くのアズーラユーザー様が特別な設備投資をすることなく、印刷現場から新たな、しかも少なからぬ利益を産み出すことに成功しています。

このアズーラ速乾印刷技術に加え、アグファは昨年8月、㈱吉田印刷所（新潟市五泉市）の吉田社長と共に、印刷現場のムダを排除した上で、さらに次のステップとして「顧客（クライアント）の印刷物のムダの排除」に努めようという取り組みを始めました。こうして共同で立ち上げたのが「フレッシュプリントコンソーシアム」です。

我々印刷業界は今まで一時的な売り上げのために、「1枚でも多くの量の印刷物」を受注することに邁進し、そのために日夜奔走してきました。しかし、それと同時に生産した印刷物の10～20%が結局は使われずに廃棄されていることを、顧客や印刷会社自身も、従来の印刷物の悪しき習慣として認識してきたのです。

廃棄される最大の原因は、情報の陳腐化にあります。そして廃棄される印刷物が、主として顧客側に無用なコスト負担がかかっていることが、顧客の印刷離れを引き起こし、インターネット等の電子媒体へ移行してしまう一因ともなっているのです。

フレッシュプリントは従来の印刷物の無駄をなくし、顧客が必要な時に、本当に必要な量だけを印刷する仕組みです。速乾印刷によりムダが徹底的に排除された印刷現場では、今まで多大なコストと手間を要していた小ロット印刷を、高品質を維持しながら迅速かつ原価を最小限に抑えて実現できます。

最新の情報を必要な時に必要な数だけ印刷する。これがフレッシュプリントの基本理念であり、これからの紙媒体の「あるべき姿」です。我々は、印刷業界人の務めとして、この「あるべき姿」をクライアントへ啓蒙すべきだと考えます。

ここ数年のワークフローやオフセット印刷機の進化は、デジタル印刷機の進歩に負けぬほど目覚ましくもあります。オフセット印刷機とデジタル印刷機は競合する物ではありません。どちらも紙媒体メディアなのです。

どちらかが生き残るかというような不毛な争いではなく、双方の長所を上手に有機的に使用し、情報が陳腐化しないような印刷物を顧客に対し提案すべきなのです。

顧客にムダを発生させない「フレッシュプリント」の実現こそがこれからの印刷であり、顧客にペーパーメディアを愛し続けて頂く最善の道だと考えます。

是非多くの印刷会社の皆様には、この「フレッシュプリント」の理念にご賛同頂き、「フレッシュプリントコンソーシアム」にご参加頂ければと思います。

本年も相変わらずのご愛顧のほどお願い申し上げます。

皆様のご多幸とご繁栄をお祈り申し上げます。

富士フイルムホールディングス

代表取締役会長・CEO　古森　重隆

平成29年の新春を迎え、謹んで業界の皆さまにご祝詞を申し上げますとともに、旧年中の多大なるご愛顧・ご支援に対し、心より御礼を申し上げます。

昨年は、熊本・大分、鳥取での大地震をはじめ、阿蘇山の噴火や、度重なる大型台風の上陸などにより各地に甚大な被害がもたらされました。被災された皆さまには、あらためてお見舞いを申し上げます。昨年6月、欧州ではイギリスのEU離脱問題が発生し、11月のアメリカ大統領選では大方の予想を覆して共和党のトランプ氏が勝利を収めましたことは、皆さまのご健勝とさらなるご繁栄を祈念いたしまして、新年のごあいさつとさせていただきます。

ビジネス拡大に貢献できるイノベーションを起こす

連結経営の強化を図るべく平成18年10月に富士フイルムホールディングスを設立し、10年が経過しました。その間、ビジネスに影響を及ぼす幾多の艱難に直面しながらも、弊社が着実に成長してこられたのは、つねに変化を予測し、自らを変革し続けてきたからであると自負しております。けれども、経営環境は、ますます厳しくなっています。電子書籍が頭打ちになる中、Amazonがリアル店舗を経営しはじめ、今までオンラインで取引していた小売業者が紙のカタログを作って売上を伸ばしたという話もあります。

ただし、これだけで印刷事業に追い風というわけではありません。

こうした大きな時代の流れを見据え、富士フイルムグループは、印刷分野をはじめ、医薬品や再生医療などのヘルスケア、そして高機能材料など多岐にわたる事業分野で、先進独自のコア技術をフルに活かし、市場ニーズにマッチした、より付加価値の高いソリューションを提供していきます。そしてつねに目線を市場に向け、多種多様な技術で皆さまのビジネス拡大に貢献できる具体的なイノベーションを起こし、世界をリードする会社として弛まぬ努力を続けてまいります。

最後になりましたが、皆さまのご健勝とさらなるご繁栄を祈念いたしまして、新年のごあいさつとさせていただきます。

〝国家の基幹は子供の教育〟を忘れるな！

ヨコオエンジニアリング
代表取締役社長　横尾　保

都知事選では、圧勝した候補者を支持しなかった党派に所属しながら、圧勝した候補者を支持した議員苛め、そして豊洲市場、東京オリンピック会場の議論は、未来の日本国を担う子供たちから見れば、何という幼稚さか。

派閥争いの〝日本劣等猿が島〟だが、ノーベル賞の受賞者を輩出する素晴らしい民族を誇りに思います。さらに重粒子線がん治療研究開発を国益のTeam Japanが一致団結で取り組んで熟成し続ける技術と精神構造は、とてつもない力を発揮する素晴らしい民族です。

我が国の国家予算の10倍の利潤を産む可能性のある世界中が注目しているエネルギー事業技術だが、これは「好事魔多し」で、武力衝突をしかねない。その技術が台頭すれば〝徳のある指導者〟による守りの北面の武士サムライが必要となる。国土国益を護る国防のサムライを尊敬しない敵方の非国民が存在している状況で、世界中のエネルギー利権を脅かす恐れのある一部の企業を誰が護るのか？

このような事を江戸時代から念頭に置いていた戦勝国側の立場に立つと、〝日本劣等猿が島〟にしておけば彼らは平穏無事であった。彼らが目指す策略の「3S政策」の「衆愚政治」からの脱皮をそろそろせねばならない時期だと思いますが、飢餓を意識せず、見るに耐えない「大食らい嘲笑低俗番組」を楽しんでいる愚民は、飢餓に苦しんでいる他民族からは、〝羨望を超えて殺意〟にしておけば彼らは平穏無事であった。彼らが目指す策略の「3S政策」の「衆愚政治」からの脱皮をそろそろせねばならない時期だと思いますが、飢餓を意識せず、見るに耐えない「大食らい嘲笑低俗番組」を楽しんでいる愚民は、飢餓に苦しんでいる他民族からは、〝羨望を超えて殺意を催す行動である〟事に気付かない愚民である自覚をせねばならないと思います。

ベンジャミン・フルフォード（Benjamin Fulford）氏の著作で、「日本がアルゼンチンタンゴを踊る日」、「ヤクザ・リセッション」、「泥棒国家の完成」に記されている多大な無駄遣いは、損失を生む「東西電力異周波数」や鉄道の「標準軌と36狭軌ゲージ」同様、採用を決めた権者の愚かさの二の徹を踏んでいる。またエスカレーターの「東西逆の立ち居の違い」を質せない派閥意識丸出しの大人たちに、国家基幹の子供の教育を語る資格はない。

「江戸しぐさ250戒500律」という言葉がある。傘かしげ・肩引き・時泥棒・うかつあやまり・七三の道・こぶし腰浮かせ・あとふさぎ・たごさくあるきなど…意味深な言葉を研究すれば面白い。

残念ながら人間の欲望と妬みの本能が引き起こすさまざまな醜い争い「足を引っ張る、出る杭を打つ」などの不必要な修羅場から離れる「子供の教育は国家の基幹」をおざなりにする理由が、日本がおかしな方向に向かっているのではと、危惧しています。